静岡新聞 2014年6月19日 （第三種郵便物認可）

「危機意識 変わったか」

浜名湖・ボート転覆事故から4年

西野さんの父・友章さん

再発、風化防止に奔走

2010年6月に県立三ケ日青年の家（浜松市北区）のボートが浜名湖で転覆し、愛知県豊橋市立章南中1年の西野花菜さん＝当時(12)＝が亡くなった事故から4年を迎えた18日、父親の友章さん(55)が同市の自宅で心境を語った。事故の風化防止に向けた取り組みを振り返り「二度と教育現場で事故を起こしてはならない」と訴えた。

心境を語る西野友章さん＝18日午後、愛知県豊橋市内

事故後、友章さん夫婦は事故原因の解明や再発防止を関係機関に働き掛けた。12年に市を相手に提訴し、28年間務めた会社を辞めた。昨年は事故の資料や訴訟などの記録をまとめた冊子を作り、教員らの安全管理意識の向上を願って静岡、愛知両県教委や豊橋市教委などに寄贈した。「ある意味で貴重な経験をした。だからこそ事故防止に取り組まないと」との思いが日増しに強くなっている。

「5年、10年後にまた同じことが起こるのでは」との不安が、再発防止活動に駆り立てる。当時の指定管理者が実施したボート訓練は、風雨が強く、白波が立つ中で決行された。事故は起こるべくして起きたと考え、「指定管理者に安全管理を丸投げしていた教員の危機管理意識が4年でどう変わったのかが見えない」と指摘する。豊橋市教委などに安全管理に関する情報発信の強化を求めている。

ビッグコンテンツ
エアコン 税込49800円 工事別 税抜

一方、友章さんは「目の前の人の役に立ちたい」と今年1月に障害者支援に取り組むNPO法人で働き始めた。5月には学校内の柔道事故や、いじめによる自殺などで子どもを亡くした保護者と、遺族を支援する「学校事故事件遺族連絡会」を設立した。

「万一、遺族になってしまった人の負担を軽減したい」。花菜さんの遺影を前に、自らの経験を役立てていく決意を新たにした。

三ケ日青年の家 城田新所長

「安全確保へ技術向上」

所員の技術向上を誓う城田守所長＝18日午前、浜松市北区の県立三ケ日青年の家

県立三ケ日青年の家は今年4月に指定管理者が施設運営受託業ヤタロー（浜松市）などで構成する企業グループ「三ケ日フィールドパートナーズ」に替わり、新たな態勢で運営を始めた。地元の協力者として事故当日の救助活動にも加わった城田守所長(59)は、設備が整っていながら所員の熟練した技術が伴っていないと感じた。そのため「安全のための準備に終わりはない」と続して取り組んでいるという。

指定管理者変更に伴って所員の約6割が替わったのを機に、公的な資格の取得を推奨している。これまでに実習プログラムの指導に当たる所員全員が小型船舶2級の免許を取得した。天気の急変を想定した対応訓練実施や安全教育が専門の大学教授らの助言を受ける計画もある。

城田所長は「（西野）花菜さんの命は僕らの心の中で生かさなければいけない」と述べ、「海や湖の教育施設の中で、安全に関しては模範になる施設を目指す」と力を込めた。

ボート転覆事故から4年

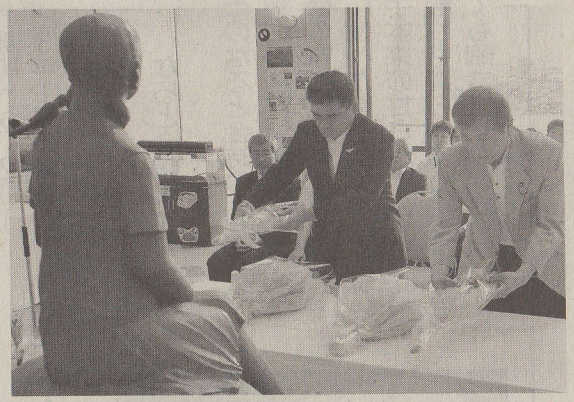
浜名湖で黙とう献花式

浜松市の浜名湖で2010年6月、愛知県豊橋市立章南中学校の生徒ら20人が乗った手こぎボートが研修中に転覆し、同中1年の西野花菜さん（当時12歳）が命を落とした事故から4年がたった18日、研修を行った県立三ヶ日青年の家（浜松市北区）で黙とう・献花の式が行われた。

式には、静岡県教委や、今年度から新たに指定管理者となった浜松市のパン製造・販売「ヤタロー」など3社でつくる「三ヶ日フィールドパートナーズ」の関係者ら約40人が出席した。

県教委の安倍徹教育長は「花菜さんがかなえられなかった夢や無念さを忘れることなく、時間とともに気持ちが薄らいでいないかを再確認しながら、教訓を教育活動に生かしましょう」とあいさつした。その後、花菜さんをイメージして建てられたブロンズ像の前に、花菜さんが好きだったヒマワリなどが手向けられた。

三ヶ日青年の家は①船舶免許を職員全員が取得②海難事故に詳しい専門家による職員向け講習を実施――などの安全対策を講じ、海洋教育施設としての再開を目指している。4月1日付で新所長に就任した城田守所長(59)は「安全のハードルが日増しに高くなっている中、地域一丸となって全国の模範となるような施設にしたい」と話した。



花を手向ける安倍教育長（左）ら（18日、浜松市北区の県立三ヶ日青年の家で）